

連載⑤ スーパーテクニク外伝

心に残る人と技術



語り 林由郎

聞き書き 杉山通敬

テッド・クローレル、エド・フアーゴル他

フェードボールの秘訣は 左肘の使い方にあった

1952年、林由郎プロは日本人プロとして、戦後はじめてアメリカ遠征を果たした。そして1953、54、55年と4年連続、米国での世界選手権に挑戦した。林プロはこれらのアメリカ遠征で、世界のトッププロたちから何を学びとってきたのか。

ダム・オシヤンタの 早いグリーンには驚いた!

うん、世界選手権は、1952年(昭和27年)が第一回大会だった。日本から中村さん(寅吉)、島村さん(裕正)、石井の三ちゃん(連夫)、それにわ

ら向うに着いたら、出場するだけで500ドル支給された。当時の岡崎外務大臣が、貴重な外貨を稼いできてもらいたいなんて、激励されて出発したもんだ。それで、あんた、着いたら500ドルもらって、ほかに1日20ドルずつの日当も支給された。

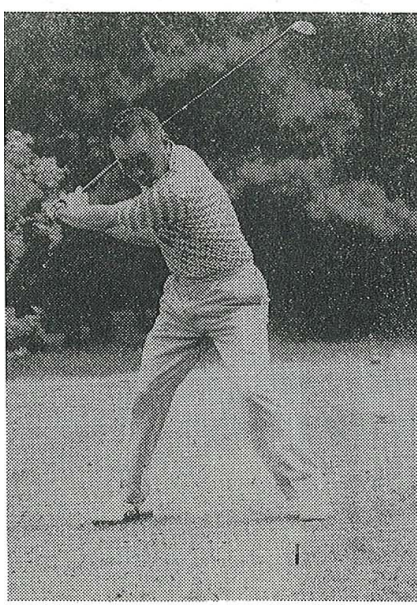
日本はグリーンは、最短距離で打つ。おまけに、スロープがきつい。日本のグリーンって言えば、高麗芝で刈り方も長い。スロープもそんなにない。というよりは長く刈ってあるから、曲り方がそんなにきつくないわけよ。そういうグリーンでやってたからダム・オシヤンタのグリーンにはおどろいた。

ブをくだつてくる。そういう計算をたてて打たないとカップに向っていかないのよ。グリーンが速いから、おっこつてくる。スロープを上って、上りきってからトロトロとおっこつてくる。その狙いをつけるのが大変だったわけだね。わたしら、日本のコースでやっているときは、グリーンが遅いんだからカップまで最短距離で打っちゃう。そのクセが抜けていないから、みんなオーバーしちゃう。遅いグリーンは最短距離で狙っていいけど、速くて、しかもスロープのきついグリーンは山かけて、遠回りさせないとダメなわけ。



「流選手はみなインテンショナルにフック、スライスを打っていた」

1952年から55年まで、わたしは4年連続でこの大会に招待されたけど、2回目のときなんか、1番でいきなりパーディ



「向うのトッププロはみんなインテンショナルなボールを打っていたナ」